



駿府と今川氏

第24回
〈最終回〉

今川氏の滅亡と駿府

氏真と家康の密約

駿府今川館を武田信玄に逐われた今川氏真は、永禄十一年（一五六八）十二月十五日には掛川城に入った。ところが、今度はその掛川城が徳川家康軍によって攻められることになったのである。家康軍の包囲が始まったのが同年の十二月二十七日で、その日から籠城戦となった。

よく言われるように、家康は野戦は得意だったが城攻めは苦手で、この時も、掛川城主朝比奈泰朝の名采配ぶりもあって、容易に落ちなかったのである。事実、この城攻めの最中、信玄から家康に「早く城を落とすように」と催促の手紙が出されている。

焦った家康は掛川城を力攻めで落とすことをあきらめ、家臣の奥平定能らの勧告に従い、講和開城の方法をとっている。要するに、氏真に対し「信玄勢力を駿河から逐ったら、氏真殿に駿河一国をお返しする。だから、ここはひとまず開城してほしい」と申し入れている。

もちろん、このことは信玄には秘密で、その意味では密約という

ことになるが、籠城していても展望が開けるわけではなかった氏真には渡りに船で、早速応じ、五月十七日、降服して開城しているのである。

武田氏が重視したのは江尻

掛川城を出た時点で戦国大名としての今川氏は滅亡したと言える。このあと、氏真は妻の実家である相模の北条氏を頼ったりしているが、駿府に復帰することはなかった。

一方、信玄は駿河を領有することに成功した。ところが、信玄は駿府をあまり重視しなかった。普通なら、駿府に重臣の誰かを入れて支配に当たらせるはずのところ、信玄は江尻城と久能山を重要視したのである。

巴川べりの江尻城には、のちに信玄の一族で重臣でもある穴山梅雪を入れており、また、久能寺を強引に移転させ、そこを城とし、久能山城を築いているのである。

それまで海を持たなかった武田氏としては、駿府よりも、直接海に接し、水軍の拠点となり

うる江尻城や久能山城の方がメリットがあると考えたのであろう。このうち、天正十年（一五八二）三月の武田氏滅亡の時まで武田氏の駿河支配が続くが、武田氏時代は駿府はあまり重要視されていなかった。

駿府が再び政治・経済の中心として脚光を浴びるのは、天正十四年（一五八四）、徳川家康が五カ国支配の拠点として、城を浜松から駿府に移してからのことである。



▲駿府を追われ今川氏真が入った掛川城

撮影：水野 茂